

竹灯り街道イベントに台風がやってきそう

プロローグ

「越後みしま竹灯り街道」は、キレイな光のイベントです。
街道脇にある崖の上にある竹林、その増えすぎて困っている竹の活用。
街道には神社仏閣が点在し、竹林の山地からの良質な湧き水を元に酒造業醸造業が発達している歴史街道を竹の中に入れたろうそくの灯りで演出するイベントです。

問題点は3点

- 1、街道付近は新潟県から急傾斜地指定を受けていること。
- 2、火を使うイベントであり危険が伴う。
- 3、10月の第4週の土曜日開催で台風や気象の変化の恐れがある。

もう少し時期をずらすのも考えましたが、雪国の11月以降は天気が荒れ、ますます危険になってゆきます。秋の夜長を竹灯りで照らすイベント自体はこの場所、この時期しかないのです。

登場人物

風間：団体の代表---軽いのりで引っ張ってゆくが、慎重になるべきところは足を止める

近藤：副代表---着実、代表の判断のフォローを心がけている。

桐山：団体メンバー---インターネットに詳しく、情報を提供する。

佐藤：団体女性メンバー---放送等担当

渡辺：団員---本部詰めで状況を把握

長岡市三島地域の竹灯り街道の開会式会場準備中

風間「台風はそれてくれたけど、吹き返しの風や雨が心配だな」

近藤「まったくだ、火が有るから風は怖いな」

近藤と風間は会場に竹を運びながら話しあっていた。

ナレーション

「イベントに台風がやってくるかと心配されたが幸いにも方向はずれて、しかも再接近したのは昨日でイベント自体にはほとんど影響が無いものと思われ、予定通りに行うことになっていた。

二人が運んでいる竹は既に加工作されており、街道周辺に設置し、竹筒内にミニキャンドルをおく

と完成である。

今日土曜日の午後4時から開会式が始まるので午前中には大方の準備を終えなければならない。

既に昨日の金曜日の段階で竹灯籠は運び込んであり、一部は配置・飾りつけも進んでいる。

イベント本番の今日は、街道沿いの寺院や神社、企業の敷地や個人の庭から街道の脇にも灯籠を並べなければならない。

その数2万本。

作業するのは「三島ライトアップ実行委員会」のメンバーと地元の三島の有志、それと 長岡市内にある美術系の大学の学生達、さらにこれに直ぐ近くに有る中学校の生徒が加わり総勢100人くらいで並べてゆきます。」

ナレーション終わり

効果音

ポロローン（明るい音、場面の）

午前中台風の影響で小雨だったものが昼くらいから雨も上がり道路も乾いてきました。

風間と近藤は引き続き作業をしています。

近藤「しかし、よかったな」

風間「やっぱり俺の普段の行いがいいすけの」

近藤「いやあ、お前さんの普段の行いだったら雨さね。」

開会式会場の設営中の風間と近藤も雨が上がり笑顔と軽口が出ています。

そこへ同じ委員会のメンバーの桐山がやってきました。

桐山「さっきネットで調べたんだが、夜になるとまた雨雲が出てきそうだ。」

風間「えっ、もう台風の影響は大丈夫かと思っていたけど」

桐山「やっぱり台風の吹き返しや雨が来そうだ。」

近藤「灯籠の火は雨なので消えちゃうから問題ないと思うけど、風が先に来たら火は消さなくてはならないな。」

桐山「何年か前に作った消火栓の位置と避難経路の大きな地図は今年も本部席に掲示しているからスタッフは大丈夫、誘導や対応が出来る。」

近藤「そうだね、消火栓よりももっと早い対応ということで各地にバケツに水を汲んで用意をしてあるし」

風間「灯籠の火を消してもさ、それが風で一般家屋に飛ばされたらまずい。」

近藤「さっきまで火がついていたものが飛んだら場合によってはイベントは二度と出来なくなるな。近所の人たちは消火がわからないし。」

風間「やっぱり風が出てきそうな時は素早く消して、消火を見せることが必要だね。」

近藤「かねてからの打ち合わせのように放送を使ってスタッフだけでなくお客さんからも手伝ってもらおう。」

ナレーション

このイベントでは街道全体に様々な案内が聞こえるように、以前から放送設備には力を入れています。

いざと言う時は、その放送設備とスタッフで対応し、場合によってはお客さんにも手伝ってもらおうというのである。

今回もスタッフでその確認を行っている。

4時に市長や関係者も来られて賑々しく開会式が行われ4時半くらいに街道一斉に点火が始まった。

幸いにも風も雨も無い。

中学生も含むスタッフがチャッカマンを片手にみるみる火をつけてゆき、あたりは少しずつ幻想的な揺らめきに包まれてゆく。

方々から歓声が上がる。

飲食店テントにもどンドン人が集まり大賑わいとなった。

ナレーション終わり

近藤「よかった、無事に開催できた。一時はダメかと思ったけど」

効果音

雨の音、逃げまどう人々の声

しかし、1時間くらいたったでしょうか仕事上がりの人達も来てさらに賑やかになったともったら、突然雨が降ってきました。

火は見る見るうちに消えて寂しくなった。

お客さんはたまらず帰り始めている。一部はお寺や神社、各施設で雨宿りをしている。

まずは、事故を起こさないことが肝心。

本部テント

本部テントにスタッフリーダーが10人ほど集まりました。

本部には以前作った防災マップが大きく掲示され、いざと言う時の避難ルート・急傾斜危険指定地域・消火栓の位置が記されています。

<http://emap2011.ecom-plat.jp/fbox.php?eid=10831>

近藤「やっぱり雨が来たな、どうする。」

桐山「風より先に雨になったな。」

風間「かねてからの取り決め通りに避難誘導だな」

渡辺「既に見物客はそれぞれ帰り始めたり、雨宿りを始めているようだけどキチンと放送で案内すべきだな」

渡辺は本部の責任者だ。

もう一人、放送係として女性の佐藤がいる。

放送が始まった。

佐藤「竹あかり街道の皆さん。本部よりお知らせです。あいにくの雨となりました。本部テント、美味しいもの広場のテントと各お寺・神社で雨宿りができます。

なお、街道自体急斜面に面していますので斜面や崖には近づかないでください。」

さらに続いて

佐藤「また、お帰りになられる際は竹灯りが消えて暗く、並んだ竹も危険ですから、街道沿いに歩かずにお近くの下り坂から下の通りまで降りてからお帰り下さい。なお、街灯はもうすぐ点灯いたします。」

すると、街道内の神社仏閣の方々、張り付いているスタッフや地元出演者がそれぞれ雨宿りと帰路について説明している。

避難のリハーサルとかはやったことはないが、竹灯り見物に来てもらっている「お客さん」という気持をスタッフは持っており、それが落ち着いて丁寧な対応になっているように見える。

そのおかげで今年も数千人の見物客は事故も無く無事帰る事が出来ました。

風間「よかった無事に見物人が帰れて」

近藤「よかった、よかった、それに雨なので一番心配の火は大丈夫だった。でもやっぱり風の場合が怖いね、異常気象つづきだから来年は突風の対策ももう少しやろうや。」

渡辺「そうなの、ほかに危険個所の案内ももう少し解り易くした方がいいですよ。」

桐山「スタッフが近くに居ない場合でもそれぞれ対応できるようにしないと。」

渡辺「そうだな、そう言われてみれば自主判断の手がかりが街や通りには少ない気がする。」

近藤「災害の時は特に迅速な自主判断が必要だしね。」

エピローグ

このイベントでこんなに急で強い雨は今年が初めて、その対応の後本部テント内では今後の気象対応や防災の話が盛り上がりました。

このように街道放送とスタッフの対応で事故もなく見物客に竹灯り会場から避難・帰宅してもらう事が出来ました。

町内運動会の運営が防災に役立つと言われますが、どうやら市民主体のこのようなイベントも防災にとっても役立つ事がわかりました。

今回何よりありがたかったのはイベント参加メンバーとして竹灯りスタッフ・街道の神社仏閣・企業の方々、イベント会場の出演者の皆さん、リハーサルも無かったのにそれぞれが息を合わせて動いてくれたことです。

ただ、そのためにはあらかじめイベント開催場所の特徴を理解し、災害・気象想定を行い避難ルートを決めてスタッフで合意しておかないといざと言う時はスムーズに出来ないであろうことも解りました。

今回は数年前に作った防災マップの意識付けがありましたが、それを活用しきったとは言えません。

ドラマにもあったように老若男女がそれぞれ自主判断できるようなサイン等の充実も検討し推進する必要がありそうです。

このドラマは、実際に起きたことをベースに作成しました。

終わり